

## 第3回 北海道東部の竪穴群調査懇談会 議事概要

### 1 日時及び場所

日時：平成28年12月13日（火） 9時30分から11時30分

場所：道庁2階 共用会議室

### 2 出席者

〈構成員：3名〉

熊木俊朗 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（座長に選出）

高瀬克範 北海道大学大学院文学研究科准教授

梶田光明 元ポ一川史跡自然公園長

〈公益財団法人北海道埋蔵文化財センター：2名〉

長沼常務理事、田口普及活用課長

〈北海道教育委員会：3名〉

西脇文化財調査グループ主幹 ほか

### 3 意見交換

#### 〈話題提供〉

高瀬氏が「カムチャッカ、北千島の竪穴群」と題して話題提供を行った。

- ・カムチャッカ半島・北千島では、新石器時代まで竪穴住居は見られないが、半島北部ではオホーツク海北岸で海洋適応を果たしたトカレフ文化の影響や古コリヤーク文化の成立により、また半島南部・北千島では千島アイヌの成立により竪穴住居が用いられるようになった。
- ・カムチャッカ半島北部、中部、南部及び北千島それぞれにおいて竪穴住居の数、住居から出土する遺物量などに差が認められるが、竪穴住居の諸特徴（平面形、付属施設、炉など）、及び立地する地形は、とくに南部と北千島で概ね共通している。
- ・カムチャッカ半島北部では一遺跡に竪穴住居が10軒以内、南部では100軒以内、北千島では最大で200軒の規模であったと想定される。北海道と同規模の竪穴群を有する地域は、南千島・サハリンに限られると考えられる。
- ・カムチャッカ半島・北千島と北海道それぞれの竪穴群を比較すると、北海道の竪穴群は存続期間の長さ（縄文から擦文文化期）及び規模の大きさが際立っている。このような竪穴群が形成された背景（偶然なのか、歴史的必然性なのか）について説明する必要がある。

さらに、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターによる湧別町「シブノツナイ竪穴住居跡」（道指定史跡）の調査、及び北海道教育委員会による調査について報告が行われた。

以上の話題提供・報告を受けて、次のような意見交換が行われた。

#### 〈出席者の主な発言〉

### シブノツナイ堅穴住居跡の測量調査について

「測量図を俯瞰すると、堅穴の大きさ・密度・分布状況等に傾向を見出すことが可能かもしれない。例えば、東側の堅穴住居が密集する一帯と南西側の大型堅穴住居が比較的まとまる一帯ではそれぞれ性格が異なっていたと考えられる。」

### 来年度以降のシブノツナイ堅穴住居跡の調査について

「来年度は測量図の精度を上げるために、調査員が現地で補足調査を行う必要があると考える。」

「今年度の調査結果を検討し、今後の調査内容について協議することとしたい。」

「限られた予算・期間のなかで、調査精度・成果のどこに焦点を当てるかが課題になると思われる。」

### シブノツナイ堅穴住居跡の周知・保全について

「関係者で現状・問題点を共有する機会を具体化していきたいと考えている。」

### 来年度以降の懇談会について

「第2次調査実施計画の内容・予算措置等を検討するための意見交換を行いたいと考えている。」

「市町村が進めている堅穴群調査・保護活用について話題提供をお願いしたいと考えている。」